大津波と家族

坂本　榮

生まれ故郷は、東北地方の最南部で福島県太平洋岸南部の漁港、いわき江名町である。

父親は終戦時に海軍航空隊から復員し、母親と結婚した。船主の次男坊のため、長男が家を継ぎ、自分は浜に揚がるサンマなどを材料に、開きの干物や竹輪の練り物を作った。

働き手は母親と中学を卒業したばかりの行儀見習い兼お手伝いが二名という零細手工業であった。お手伝いの静と留は年子の妹と私の世話をしながら、仕事を手伝った。

私の祖母タケの親は魚網を製作し、補修する網大工で、銚子港まで徒歩で行き魚網の技術を覚え町に広めた棟梁であった。父親の実家は、イワシ漁で当てたときに造った大人二人がかりの太い大黒柱が二本と、囲炉裏の上に荒削りの竜骨から自在鍵が下り、紫檀、黒檀の材料を吟味した納戸を持つ船主の館である。

しかし、無人では火の元が危ないと近所の親類から指摘された母親は、脳卒中の後遺症を持ち東京でリハビリ中の長男の私に了解を求め、取取り壊さざるを得なかった。祖父母や父親の兄弟を雨露から凌いだ立派な船主の館を壊すのは母も辛かったであろうが、住む子供たちがいない今、勇断とも言えた。

亡き父親と先祖伝来の墓は、真福寺の墓域のもっとも高い場所で、父親が好きだった太平洋と江名漁港が見渡せるところにあった。私は脳卒中の後遺症があり、寺参りは本堂までで墓には行けていない。石組みの墓域は崩れ落ちていないかと気がかりでならない。

弟の勉は東京外国語大学の露語学科を卒業後に、学友が商社などに就職するのを尻目に、割りが良い夜のバイトで資金を貯め、アジアからアフリカの放浪の旅に出た。資金は少ないが有り余る時間があるため、当時は未発達であった飛行機の代わりに船旅であった。最後の寄港地から、帰国したら東洋医学の勉強がしたいのでカタログを取り寄せておいて欲しい、と葉書を寄こした。

東洋医学とは鍼灸などのことである。弟は帰国後、当時、渋谷にあった専門学校に入学して資格を取り、帰郷し、実家の隣に自宅兼治療院を開業した。

当初は、仲間の多くが失敗していたため自信がなかったが、楽観的な性格の父親に何事もやってみないと判らないだろう、と説得されて開業した。

建物は、海沿いにあった古いアパートの土地がバブル経済の終わる間際に売れた資金で建築した。

地域の名医に弟子入り後に先生が急死し患者が転院したことと、私の高校同期生の自営業者も来てくれたことから馴染みのお客も多く、広い土地を駐車場にして、残りで家庭農園や地鶏の鶏舎を作って満足のいく生活をしていた。

しかし、マグニチュード9の未曾有の大地震に遭遇し、父と母が造った浜辺の実家と弟の治療院は全壊状態であった。

父親と二人でした水産物加工業と父親の実家が持っていたサツマ芋畑で始めた養鶏業で、生物を扱う仕事のために好きな旅行も諦めて、子供四人全員に東京の大学で教育を受けさせた。

母が父と歩んだ五十年強の思い出が詰った家は灰燼に帰してしまった。

事前に情報を得た兄弟は母を伴い、山を開発したニュータウンに住む妹の家に身を寄せていたため全員無事であったのは不幸中の幸いであった。

母は来年には米寿を迎える高齢だが足腰が丈夫なのが自慢で、誘われれば国内の温泉ばかりか外国にも行く元気な体である。しかし、家と共に思い出の品物も失った想いはいかばかりであろう。

弟夫婦は以前から母の家の横の家に住んでいたときのように、これからも長野で母の面倒を見ると申し出てくれ、故郷のいわきで母と兄弟で残っている建物残骸の前で最後の集合写真を撮っておこうと提案があった。

長子、長男のため古いアルバムに残っていた、ヒナ壇飾りの前に年子の兄妹を愛しむように微笑む二十七歳の若く美しい母が写った写真と私を肩車した若い父などのセピア色をした写真や子供が写った全ての複写を、全部母にあげるつもりで持参した。

写真を見た母は思った以上に喜び「私は全てを失くしたので全部欲しい」と言い出した。特に子供のものは全て欲しい、と言う。母性本能などと月並みな言葉では表わせない女親の思いを知った瞬間であった。

従姉のまり子は伯父の家を継ぎ、伯父が自分の母を顕彰して造った小さい坐像を守っていた。前が海で後ろの崖を背負う災害に弱い土地柄、地震と津浪にはひとたまり

もなかったであろう。せめて身体だけでも逃げていたことを祈っていたが、偶然遊びに来ていた次女の着くまで助かっていて安堵した。

美空ひばりの「乱れ髪」の舞台である塩屋崎の麓で歌碑も建っている、地区で最も海水浴客を集める薄磯地区は大津波の被害が一番酷い地区であった。

大震災後、初めて帰郷し、妹の軽自動車に従い東京から同行してくれた娘婿の新車で薄磯地区を回った。

浜に直接面した薄磯地区は、鉄筋コンクリート造の母校・豊間（とよま）中学校が原型を留めているだけで、民家は全て家の原型が判らないほど瓦礫の山であった。瓦礫にふさがれた道は通行が不能の場所もあり、娘婿の新車を傷付ける恐れもあるので妹に携帯で山側の県道に抜けるように指示した。

県道沿いにある町の基幹産業である蒲鉾屋の近くを通ると、製品になる前の魚肉のミンチが腐った異臭が車に入り込み、窓を開けてしばらく走っても抜けなかった。

日帰りで帰京し、震災後、百日目に薄磯地区の合同葬儀のニュースが新聞に載った。妹が出席すると、妹の娘の同級生の祖母は私の中学校の同級生と判ったという。

その後、Ｍ７の余震が続き不安な日々が続いている折に、福島原発の放射線漏れが発生し、ついにいわきも退避圏内に入った。

家族は住み慣れた故郷、特に母には季候温暖で災害も少なく、魚介類が特段に美味しいと自慢の故郷を後に、親戚や縁者を頼って故郷を後にせざるを得なかった。

私の長男は東京生まれの東京育ちで、東京の役所に勤め生計を立てている。

長男にとって故郷は、夏季休暇に海水浴を兼ねて実家に帰郷し、祖父の盆参りをした場所に過ぎない。故郷意識は薄く、実家がなくなった今、墓守の適任ではないが、話し合いの結果、「僕はそんなにドライではない。両親と祖父母様の墓は自分の代までは長男として墓守をする」と約束してくれた。

家名の最後の象徴である墳墓は守られますのでご安心下さい。母さん。

鎮魂碑・故郷の海原よ

坂本榮

我が故郷は
合磯浜（かつそ）　二見浦（ふたみうら）二つ岩から
豊間塩屋崎（とよましおやざき）へ
長い弓状の白砂で
その昔　青松生え　漣（ささなみ）寄せ返す
朝に夕に聞く
その潮騒を揺籃に
今とはなりぬ

二〇一一年　三月十一日
突如　海原襲った　大津浪
三十メータ　五階ビルを越える　高い潮
その波頭は　白い爪を研ぎ　悪魔となり
テトラを　防波堤を越え
海岸の人々を流し
民家を　国立病院を　廃墟に
車を流し　年老いた母の家を
善良な同胞（はらから）の治療院を
押し流す

塩屋崎下　母校　豊間中学校
下校時　生徒五人を流す惨事
いざ帰郷せん
事実を前に
言葉　空虚なれ
たとえ微力でも

建てん

鎮魂の碑を
我が故郷の海原に